

精神障害者がホームヘルパー！

——姫路こころの障害者自立支援の動きとともに——

本誌編集委員 株式会社ストローク 代表取締役 金子鮎子



有限会社サポートセンターれいめい

〒679-2151 兵庫県姫路市香寺町香呂210-1

エステートピアⅡ・102号

TEL・FAX 079-232-6500

編集委員から

精神障害者社会適応訓練事業（社適訓練）の協力事業所は「職親（しょくおや）」と呼ばれることもあるが、今回訪問したサポートセンター「れいめい」も、この社適訓練を利用して、精神に障害のある人々が育てられている兵庫県精神保健職親会の副会長さんの会社である。障害のある介護ヘルパーと利用者の交流がさらに地域につながっている様子をお伝えしたい。





「サポートセンターれいめい」の野村浩之代表取締役 (左) と小林真理子サービス提供責任者

ほとんどのホームヘルパーが精神障害のある人たちというユニークな居宅介護支援事業所、有限会社サポートセンター「れいめい」は兵庫県姫路市の北、香寺町にある。

JR 播但線香呂駅のすぐ近く、「れいめい」のホームヘルパー利用者は近所のお年寄りや身体障害のある方々が多い。

2004 (平成16) 年9月に設立された「れいめい」は、現在20カ所ほどの利用者を抱えている。職員15名のうち10名が統合失調症やうつ病といった精神の障害のあるヘルパーで、利用する人たちからは名指しでオーダーがくるほど好評だという。

精神障害のホームヘルパー？

「精神障害の人がホームヘルパー？ そんな仕事ができるの？」とか、「訓練をして資格を取っても、その人たちにヘルパーとして介助を頼む人がいるの？」と

いった疑問をもつ向きも少なくない。

お年寄りと精神に障害のある人たちは、その緩やかなテンポがマッチしている相性があるので、以前から高齢者の給食宅配事業などでも成果を上げている。また、介護施設で働いている障害者も少なくない。しかし、個人宅でのホームヘルプの仕事はなかなか敷居が高いに違いない。

「れいめい」も設立当初から精神障害者のヘルパーがいたわけではない。たまたま障害を隠して働いていた人がいた。代表取締役の野村浩之さんはその人の様子を見て、精神障害のある人でも、「ひよつとしたらこの仕事、いけるかもしれない」と感じたという。

かつて建築関係の仕事をしていた野村さんは、精神病院で働く作業療法士の友人に頼まれて、ある入院患者にガラス・サッシの工事の手ほどきをしたことがあった。こういう人たちのために「何か」できないかと考えたのが、精神障害者の

就労と関わるきっかけだった。

社適訓練から、いまや主任に

「れいめい」の精神障害のあるホームヘルパー第一号は高橋琢さん。ヘルパー歴丸6年の主任で、ヘルパー事業所開設の資格も持つ52歳のベテランだ。統合失調症だが、みんなが苦手な早朝や真冬の仕事にも心強い戦力である。

野村さんが県のジョブコーチとして、違う職場の支援に入っていたときに出会った。麵づくりの現場で働いていた高橋さんは仕事が覚えきれず、四苦八苦していた。

高橋さんはおっとりした人柄。野村さんからヘルパーの仕事をすすめられた。短い時間の精神障害者社会適応訓練事業(社適訓練)からということ、当初1週間に1回、1時間程度の訓練から始め、徐々に時間を延ばして仕事に慣れていった。3年(当時)の訓練中にヘルパー2級の資格を取得した。「れいめい」ではほとんどのメンバーが社適訓練期間中に毎週2回の講習に通い、この資格を取っている。

ヘルパーの仕事は、掃除・洗濯・食事作りが基本だが、訓練生にはそうした家事には不慣れで自信のない人が多い。台所のガスコンロの火の付け方や目玉焼きの作り方から教わることも少なくない。



精神障害歴のある「れいめい」のホームヘルパー第1号、高橋琢さん。ヘルパー歴丸6年になる

● 社適訓練（精神障害者社会適応訓練事業）

働きたいが、直ちに就労は難しい精神障害者が、職場での訓練を通じて働く習慣や職場でのマナーなどを学び、仕事の技術を身に付けながら集中力・継続力を高める訓練。熱心な協力事業所（職親）が各都道府県などの自治体と要綱によって契約を結び、委託費を受給する。古くは、精神病院の院外作業として始まり、1982（昭和57）年度から国庫補助事業となり、1995（平成7）年からは「精神保健福祉法」上に位置づけられた。2012（平成24）年度には同法から削除されたが、多少形を変えて全国の約7割の自治体がこの訓練事業を継続しており、一般の雇用に結びつくケースも多い。

「れいめい」の考えは、こうした家事サービスだけがヘルパーの仕事ではなく、「利用者の気持ちに沿うことが第一」と、「お年寄りの話し相手をしていて時間が伸びてしまっても焦らずに、時間が多少超過してもいい」、「食事作りの時間が間に合わなければ、弁当を買ってもいい」という柔軟な考え方である。

こうした「れいめい」のヘルパーたちの働きぶりは、普通とはちよつと違う。いわゆる健常者のヘルパーは能率的でテキパキと手際がよいが、次の利用者宅へと慌ただしく急ぐこともある。入浴サービスにしても、お年寄りによっては、もう少しゆっくりしたい、お風呂もササッと済んでしまつて味気ないという人もいる。

助けられたり、助けたり

「れいめい」のヘルパーたちは、社適訓練を通じて利用者にもヘルパーの訓練にも時間をかけている。その訓練の第一歩は、会社と同じアパートの隣棟に住む75歳の全盲のマッサージ師、駒田次男さんが、新人に理解ある稽古台になつてくれているのだ。

身のまわりを世話していた奥さんを10年前に亡くして、途方に暮れていた駒田さん。その日々の世話をしながら、「れいめい」のヘルパーは育てられてきた。

ヘルパーの基礎訓練には目の不自由な方への接し方や、コミュニケーションの取り方など学ぶことが多い。例えば、お茶をいれるときも、「駒田さん、ここにお茶を置きますよ」と湯飲みにそつと手を添えて知らせる心遣いを忘れない。

「れいめい」では新しい利用者につく場合、トップやヘルパーの責任者と一緒に訓練生が必ず事前に訪問する。障害者であることをオープンにしたうえで、「この人が担当としてお宅に伺つていいか」と、まずは様子を見て納得していただくことを前提としている。

夢はお嫁さんをもらつたと

高橋さんと同じ病院に通院する赤藤英樹さん（統合失調症・35歳）も、以前はいろいろな仕事に就いても続かなかつた。同じ病院の仲間がやっているなら、「できるかな？」と、この仕事に入ったという。

社適訓練のあと、精神障害者に特化した「ステップアップ雇用」をふまえての雇用で、今年で4年になる。初めは失敗ばかりで、きつかったようだ。約束の日に訪問すると、認知症の方から「帰れ！」といわれて、先輩が来るまであせつてしまったこともあった。いまでは帰り際にわざわざ送ってくれるお年寄りに、「あ



全盲の駒田さん宅で、ホームヘルパーとして仕事をする赤藤英樹さん



りがどうね」と言葉をかけられると、「この仕事について本当によかつた」と思う。利用者からすると、「サービスをしてあげる」と「上から目線」のように感じられることもあるようだが、このヘルパーは、自信はなくても、わからないことは素直に聞く「下から目線のヘルパーだ」と感じるようだ。ある認知症のお婆ちゃんは、まるで孫が来るかのように、「今日はあの子が来るから、私がしつか



「自分の体験を生かして、いじめや自殺をゼロにしたい」と話す福永勝博さん

りして教えてやらなきゃ」と首を長くして、笑顔の赤藤さんの訪問を待っているのだという。

こうした支え合いのなかで育った赤藤さんは、いつしか自信をつけて、将来は障害年金を受けずに自分で稼ぎたいと思っている。次は「お嫁さんをもらうこと」と、みんなの前で将来の夢を話すようになってきた。

ゆくゆくは親の面倒を

ヘルパーの資格を持っていた福永勝博さん（42歳）は、ハローワークから、高橋さんや赤藤さんの通っている姫路北病院のデイケアを紹介され、そこからさらに「れいめい」を知ることになった。

福永さんは、うつ病から一時は絶望的になったこともあったが、周囲に支えられながら社適訓練を経て、兵庫県独自の社適訓練である「雇用指向型」から「ステップアップ雇用」へと進んだ。そして本格的雇用になり、「れいめい」に来てもう5年になる。初めはつらくて辞めたくなったこともあったらしい。家族の期待による重圧に、つぶれそうになったこともあった。いまは家を離れて自立。会社の近くのアパートで暮らし、安定して仕事に打ち込めるようになり、落ち着きを取り戻してきた。

家族からの自立を助けたのも、代表取



姫路北病院 西野直樹院長

締役の野村さんをはじめとする姫路の「わーくわくねっと」の支援者たちの計らいだった。

その福永さん、もつともつと働いて、いずれは自分のことを心配してくれた親の面倒を見るつもりだという。そして自殺者が年間3万人を上回るという最近のニュースを見るにつけ、この国が「自殺者ゼロ」になるために、福永さんは自分の経験や力を何か世の中に活かしたいと考えている。

社適訓練卒業のケース会議

坂田泰智さん（33歳）は8月で社適訓練を終わって、「れいめい」で働くことが決まっている。受診先の姫路北病院で、主治医で院長の西野直樹先生も同席して、訓練最後のケース会議が開かれた。

会議はこれまで2カ月に1回程度開かれてきた。今回も受け入れている職親事業所である「れいめい」の野村さんをは



「わーくわくねっと」三木章弘キャリアサポーター

じめ、病院のケースワーカー、保健所やハローワークの担当者のほか、姫路特有の就労支援システム、キャリアサポーターの三木章弘さんも出席した。

社適訓練を終えた坂田さんには奥さんや子どもがいる。以前は自動車販売会社の営業マンだった。「うつ」から紆余曲折を経て、「れいめい」で正式雇用になる前に、ぜひともガイドヘルパーの資格を取りたいという。

西野院長からは、その資格をなぜ、いま取りたいと考えているのかを聞かれた。坂田さんは、利用者のなかに全盲で旅行好きな方がいらっしやるので、その方を旅にお連れし、その笑顔を見たいことや、資格を持てば、収入のアップにもつながること、などを理由に挙げた。

坂田さんの説明に耳を傾けた西野院長は、「なるほど。現実的な考えだね。自分の考えをきちんとまとめて、関係者のみなさんの前で、説得力ある話し振りだったね」と卒業祝いの言葉をかけた。関



社適訓練を終える坂田泰智さん（下の写真中央）。坂田さんも参加したケース会議の様子

係機関の方も、「何かあったら、いつでもグチを言いに来てください」といつてくれた。こんなに大勢の方たちに支えられて、坂田さんは、「本当に感謝の一言です。この気持ちを無駄にしないようにします」と、感動的なシーンになった。坂田さんは、将来はお年寄りから喜ばれる居宅介護支援事業所を、自分でも立ち上げたいと考えている。

高齢者のパソコン教室も

「れいめい」の事業は介護事業だけではない。2年前、地元の香寺町の自治会から高齢者のパソコン教室を委託された。パソコン歴の長い身体障害のある事

務職員、三浦康宏さんが講師を務めている。秋の半年コースは、毎週1回の2つの連続講座。「高齢者が参加しやすいゆつくりペースだ」と地元のお年寄りの人気を集め、リピーターも少なくない。講師の三浦さんの食事やトイレ、移動の介護は、同じ「れいめい」の仲間の仕事だ。坂田さんはそのかたわらパソコン教室のサブリーダーとしても手伝っている。こうしたきめ細かな仕事の組立てで、「れいめいの採算は？」と野村さんに聞くと、「そこは何とか『まあまあ』で、みんなで頑張ってもらっています」ということだった。「れいめい」のヘルパーの活動は、地元の神戸新聞でも取り上げられ、障害者の家族からの問合せや相談が相次いだようだ。



地域の高齢者向けのパソコン教室。右から2人目が三浦康宏さん

兵庫県では精神障害者の社適訓練が以前から活発で、その実績は全国的でも一、二を競う先進県である。2008（平成20）年10月からは、雇用にはかない「実習型」と「雇用指向型」の2つのタイプに分け、訓練生をより雇用へと誘導する工夫がなされてきた。さらに姫路を中心とする中播磨地域の特色は、「社適訓練」の段階から支援に職場をまわるキャリアサポーター制度である。障害者の雇用支援策として、1週20時間以上の雇用にはジョブコーチ制度があるが、訓練である「社適」には国の制度であるジョブコーチは利用できない

キャリアサポーターが巡回

パソコン教室の講師の三浦さんの介助をしながら、サブリーダーとしても活躍する坂田泰智さん





兵庫県精神保健職親会総会のシンポジウム「働く」を考えよう

い。

身体障害の人が働くには車いすなどのハード面のサポートが必要であり、知的障害者や精神障害者には、人によるサポートが不可欠だという理解は広まっているが、精神障害の人たちへの就労支援はどの段階に、どういう人による支援が、働き続けるポイントなのか……。その意味で、キャリアサポーターは「永年企業でのキャリアを持った定年後の人材」が社適訓練の段階から、マメに巡回支援する画期的な仕組みである。

姫路では数年来、支援者のなかで、精神障害者だけでなく発達障害者やニート、引きこもりなどの若年者を含む心的障害者への就労支援は、「早い段階から、切れ目なく、時間をかけることが必要だ」という機運が高まってきた。

心の障害者就労支援の輪

こうした動きの発信源は、「NPO法人姫路こころの事業団」から始まった。理事長の濱中美貴子^{はまなか}さんは、かねてから、心の障害のために就労に踏み出せなかったり、あるいは働き続けることの難しい人たちには特別な支援の仕組みが必要だと考えていた。

4年前の2009年4月、地元の財界に人脈の広い濱中さんは、企業・医療・就労支援機関などに呼びかけ、「姫路こ

ころの障害者自立支援チャリティーゴルフ」を開催し、200人近い賛同者を集めた。以後毎年開催されたチャリティーゴルフの寄付金は、毎回140万円を超える金額となり、これを基金に活動を広げてスタートした「わーくわくねっと」(中播磨心的障がい者就労支援協議会)は、ここから姫路独自のキャリアサポーターを誕生させた。

この「わーくわくねっと」には、社適訓練の実績を持つ居宅介護支援「れいめい」の代表取締役の野村さんほか13社の職親企業(訓練生を受け入れる協力事業所)や施設外就労の1カ所、請負作業3カ所の発注元と、彼らの就労の場が市内



NPO法人姫路こころの事業団の濱中美貴子理事長(右から2人目)を中心に「わーくわくねっと」の打合せ会

に次第に広がった。

また、職場に入りたての不安定な時期に相談にのってもらうことで、社適訓練からの雇用も増え、職場定着の実を結んだ。

企業からは本音の話ができると、キャリアサポーターの存在は大歓迎である。こんな仕事はやってもらえるかと、「わーくわくねっと」に企業からの提案も持ち込まれ、キャリアサポーターが率先して仕事にあたって指導するため、企業も働く人も安心できる環境が生まれた。

また、「働くのが一番の薬」という姫路北病院の西野院長を招いての商工会議所での会も、企業の障害者受入れの機運を大きくバックアップした。

今年の兵庫県精神保健職親会総会のシンポジウム「働く」を考えよう」では、「れいめい」の赤藤さんと坂田さんが司会を担当、200人を越える市民の前に、心の障害があっても働ける実際をアピールした。

これは「わーくわくねっと」、「NPO法人コムサロン21」との共催で開催され、画期的なイベントとなった。

こうしたこころの障害やハンディのある人たちの就労を助ける市民のネットワークは行政を巻き込み、さらに障害のある人の働く力とその応援団の活動が姫路の人々の意識を確実に変えているようだ。